

保育者に求められる音楽的な専門性の育成

—養成校での M.L. システムによる授業の取り組みから—

赤津 裕子

【要旨】

今、保育者には演奏技能のみでなく、音楽を保育の場で応用できる音楽的専門性が求められている。この音楽的専門性を育成する第一歩として、「楽曲アレンジ」の授業に取り組んだ。授業後の学生の振り返りと出来上がったアレンジ作品の分析を通じて、保育者養成に必要なピアノ等鍵盤楽器の指導の在り方を考察した。この結果、学生が音とじっくり向き合うことの意義と、イメージを音で実現するための技能の重要性が確認できた。また、このような創造的な授業の場で M.L. システムが効果的であることも確認できた。今後の課題は、創造的なカリキュラムの体系化と保育実践への適応性の実証と考える。

キーワード：保育者 M.L. システム 音楽的専門性 楽曲アレンジ 保育者養成

1. 問題の所在

本校は幼稚園二種免許状と保育士資格を取得することのできる2年制の保育者養成校である。長期の休みになると、卒業生がピアノや子どもの音楽活動についてよく相談に訪れる。その内容は園歌や子どもの歌の伴奏、簡単で効果的な伴奏付けの方法、発表会にふさわしい選曲や音楽劇の劇中歌・効果音楽の作り方、リズム等子どもの動きに合わせた曲づくり等、ピアノに関する相談がほとんどである。本校の学生の多くはピアノ初心者であり、2年間で基本的な演奏技能の基礎を身に付けて幼稚園や保育所に就職していく。卒業後は、目の前の子どものために弾けるようになりたいという強い気持ちからまた大きく成長していく。一方、実践の場では、既存の楽曲を練習して弾きこなすだけでなく、アレンジや作曲、また即興的に子どもの動きに対応するような技能も必要とされている。養成—採用—現職研修という流れの中で、卒業生が直面することは養成段階における課題であり、以前からも指摘されていることである。例えば宮脇（2001）は保育者に必要とされる音楽的能力は、「幼児一人一人を見守りながら弾き歌いをし、幼児の音域に合わせて時には移調ができて、更に身体表現においては、その動きに合わせて即興的に演奏できることである¹⁾」と述べている。（文末引用文献参照・以下同じ）また坂田・山根・伊藤（2009）は、「養成においても学生がピアノの

いろいろな演奏技能の基礎的な力を身に付けること、アレンジできる力をつけることなどについての重要性をより認識することが求められよう²⁾」と述べている。

本校でもピアノ等鍵盤楽器の指導については、1年次でピアノの基礎演奏技能の習得、2年次では子どもの音楽的な表現を援助する指導法として「伴奏法」「弾き歌い」「移調奏」「模擬保育」、子どもの音楽表現を支える保育者の音楽技能の向上として「アンサンブル」「アレンジ」「即興演奏」を行っている。その中でも特に初心者のためのカリキュラムの作成については成果をあげている³⁾。その内容は学習の効率化、教材の精選、M.L. システムの活用、学生の意欲の喚起等の追求と担当講師との研修の充実及び PDCA サイクルの活用等である。これらの取り組みにあたっては、養成段階での学びと保育者に必要とされる資質・能力とのつながりを常に考えてきているが、先ほどの卒業生の実態や先行研究の指摘から子どもの表現に寄り添えるための技能の向上がさらなる課題であると感じている。

この度、教職免許法の改正において、教科と教職の一体化といった教職課程の大括り化が実施される⁴⁾。

（文部科学省 2017）大学レベルの学問の専門性と子どもへの指導法の融合である。平成 31 年度にむけての再課程認定では「教科に関する科目」がなくなり、新たに「領域に関する専門的事項」が加わる。領域とは保

育内容の5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）のことである。時代の流れの中においても、ピアノ等鍵盤楽器の指導を考えるにあたっては、5領域の内容と子どもの表現を支えるための視点をもって、再度見直していく必要がある。

2. 研究の目的

これらの音楽的な専門性を育成するための第一歩として、本研究では「楽曲アレンジ」を取り上げることにした。保育の中でのごっこ遊びや劇遊びでは、場面に応じた表現活動がよく行われる。その時に保育者が表現する音楽が、子どもの表現を引き出し、発展させるのに大きく影響する。「楽曲アレンジ」での体験はそういった活動を支える専門性につながるものと考えられる。また学生自身が音とじっくりと向き合うことやイメージを音楽として実現する体験をもつことが重要であると考えられる。音と主体的に関わることは創造的な活動である。子どもの表現を受け止めるためには、保育者自身が音や音楽に対して柔軟であり、音で表現することの楽しさを知っていることが重要である。そのことが子どもの表現に共感し、広げ、深めることにつながるからである。そこで本論では、学生が「楽曲アレンジ」

表1 「小ぎつねの山の四季」のアレンジの概要

いろいろなアレンジの方法を知ろう『小ぎつねと山の四季』（編曲 木村充子）

1	山の春	ソロ	Andante	4分の2	左手はコードの構成音の中から選択
2	山の仲間と遊んだ夏の日	ソロ	Moderate	4分の2	左手はスラーとスタッカートによって軽さを表現
3	山の衣替え	ソロ	Andante	4分の2	左手は低音域で旋律を担当、右手はアルペジオ
4	小ぎつねのお化粧	2台ピアノ	Allegro	4分の2	ピアノ1は旋律の音を増やし、おどけた様子を表現 ピアノ2はスタッカートで軽快に
5	山の雪化粧と仲間とのお別れ	リコーダーとピアノ	Andante	8分の6	舞い落ちる雪の様子を高音域のアルペジオによる伴奏で表現
6	ひとりぼっちの小ぎつね	ソロ	Adagio	4分の2	長調が短調に
7	仲間たちとの思い出	リコーダーとピアノ	Moderate	4分の4	ハ長調がト長調に移調、旋律のリズムが付点に
8	春の気配	2台ピアノ	Swing	4分の2	スイングのリズム、ジャズ独特のセブンスのコードを多く使用
9	仲間たちと踊るワルツ	2台ピアノ	Tempo di Valse	4分の3	ワルツのリズム、左手をオクターブで重ね旋律の音を増やし華やかにアレンジ

② 楽曲についてシーンを設定し、場面にあったアレンジをしよう

前段階で学んだアレンジの方法を活かし、実際に楽曲を選んで、5つから6つのシーンを設定して、場面にあったアレンジに挑戦する活動である。

にどのように取り組んだか、学生の出来上がったアレンジ作品と事後の振り返りを分析し、保育者養成課程において必要なピアノ等鍵盤楽器指導の在り方を考察する。

3. 研究の方法

（1）対象

平成28年度後期の11月～平成29年2月まで、竹早教員保育士養成所での2年生選択「音楽表現」のうち筆者が担当した8名を対象とする。

（2）授業内容の概要

この授業は、大きく2つの内容から成っている。それぞれの授業の概要は次の通りである。

① いろいろなアレンジの方法を知ろう

『小ぎつねの山の四季』⁵⁾（編曲 木村充子）の9つのシーンを8名で分担し、演奏発表を通して、アレンジの方法を理解することがねらいである。この編曲に含まれる変化の要素は、表1に示すように、テンポ・転調・リズム・拍子・コード・音域・スラーやスタッカート等・音色である。

（3）活動場所

これらの2つの活動を行う環境として、M.L.教室で行った。『小ぎつねの山の四季』の演奏はソロ・2台ピアノ・ソロ楽器と伴奏楽器の多様な演奏形態で編曲されており、8名が一斉に活動を行うには、M.L.システ

ムの「ブロック別学習指導の切り替え」と「豊富な音色」と「ヘッドホン」の機能が効果的に作用するからである。また自身のアレンジの学習においても「豊富な音色」と「多重録音」の機能は、初心者がイメージを音として実現するのに大きな助けになると考えたからである。

(4) 分析方法

この授業の中から平成29年2月8日に行われた発表をもとに、「それまでの学生の取り組みの様子」、「出来上がったアレンジ作品」、「学生の事後の振り返り」を分析する。学生の表現活動は、ビデオ撮影し、その中から作品の部分を抽出して筆者が楽譜に書き起こし、分析・考察した。該当学生には承認を得たものである。

3. 分析・考察

(1) 学生のピアノレベルと選択した楽曲

対象となる学生の入学時に出された課題と1年生終了時の試験曲を記したのが表2である。課題に出された楽曲の難易度で学生のピアノ技能のすべてを判断することはできないが、大まかな傾向をつかむことができる。S2、S3、S8の学生は幼少の頃からピアノ教室に通っていた。S1、S7の学生は途中で辞めてまた始めた。S4、S5、S6の学生はピアノ歴が短い。これら8名の学生が選択した楽曲は以下の通りである。

表2 学生のピアノレベルと選択した楽曲

	入学時のレベル	1年生終了時	楽曲名	作曲
S1	バイエル75	ブルグ15	はるがきた	岡野貞一
S2	ブルグ25	チューリップダンス	かたつむり	文部省唱歌
S3	ブルグ23	ソナチネ7	ゆき	滝廉太郎
S4	バイエル59	ロマンス	山の音楽家	ドイツ民謡
S5	バイエル100	ブルグ22	どんぐりころころ	梁田貞
S6	ブルグ5	ブルグ18	まつぼっくり	小林つや江
S7	ブルグ2	ソナチネ	ぶんぶんぶん	ボヘミア民謡
S8	ソナチネ15	甘なっとう	うみ	井上武士

(2) 作品の紹介

8名の学生の中から、ピアノ歴の長いS3の学生、ピアノ歴の短いS6の学生の楽譜の部分を紹介する。以下の楽譜は、ビデオ記録をもとに学生の作品を筆者が書き起こし、学生が設定したシーンの説明と対応させたものである。

① S3「ゆき的一天」(「ゆき」作曲 滝廉太郎)

シーン1 【粉雪】

雪がパラパラと静かに降り始める。

(♩=92 チェレスタ)



シーン2 【回雪】

犬が喜び外で雪と遊んでいる。

(♩=92 ピアノ)



シーン3 【衾雪】

だんだん暗くなりあたり一面真っ白になる。

(♩=80 旋律チェレスタ 伴奏ストリングス)



シーン4 【豪雪】

夜、大吹雪になり、音をたてて降っている

(♩=80 ストリングス)



シーン5 【銀雪】

太陽が昇り、朝になると雪は止み、太陽の光で雪がキラキラと輝いている。

(♩=84 旋律グロッケン 伴奏ハープ)



② S6「まつぼっくりの冒険」

(「まつぼっくり」作曲 小林つや江)

シーン1 【目をさましたまつぼっくり】

ある朝、太陽の光で目を覚ましたまつぼっくり。とても清々しい良い気持ちです。まつぼっくりみんなで朝の歌を歌うようです。

(♩=80 旋律バイオリン 伴奏ピアノ)



シーン2 【逃げるまつぼっくり】

するとそこへ山のリスがやってきて、まつぼっくりを食べようとします。まつぼっくりは、急いでもころころ山を転がっていきます。

(♩=92 マリンバ)



シーン3 【はぐれてしまったまつぼっくり】

逃げているうちに、みんなとはぐれてしまいました。他の仲間は無事かどうか不安でしかたありません。ひとりぼっちのまつぼっくり。

(♩=80 バイオリン)



シーン4 【疲れて眠るまつぼっくり】

とうとう探し疲れてまつぼっくりはいつの間にか眠ってしまいました。明日は仲間のまつぼっくりに会えるでしょうか。

(♩=76 グロッケン)



シーン5 【森の仲間と踊るまつぼっくり】

目を覚ますと仲間のまつぼっくりたちが集まっていました。森の仲間たち、どんぐりやリス、キツネたちと喜びのワルツを踊ります。

(♩=76 トランペット)



(3) 作品の分析

作品の分析をするにあたって、学生が使用した音楽の要素やその他の方法について見ていきたい。

表3 学生が行なったアレンジの方法

	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	計
音色の変化	○	○	○	○	○	○	○	○	8
テンポの変化	○	○	○	○	○	○	○	○	8
伴奏のアレンジ	○	○	○	○	○	○	○	○	8
旋律のアレンジ	○		○	○	○	○	○	○	7
リズムや拍子の変化	○		○	○	○	○		○	6
多重録音	○	○	○	○		○		○	6
他楽曲の導入	○	○			○	○			4
転調	○				○	○			3
コードの変化					○			○	2
その他の工夫			○				○		2
計	8	5	7	6	8	8	5	7	

表3は、学生が使用したアレンジの方法を使用頻度の多い順にならべたものである。全員が使用していたのは「音色を変える」「テンポを変える」「伴奏（主に左手）をアレンジする」である。各々の方法について学生の作品をみることにする。

① 音色を変える

音色はM.Lのクラヴィノーバに内蔵されている音色の中から選んでいる。学生にとって、場面ごとの変化を表現するのに、一番手軽で効果が大いと思われる。「ゆき」では、静かに降る様子をチェレスタ、遊んでいる軽快な感じはピアノ、大吹雪はストリングス、太陽のキラキラをグロッケンで表している。またS4の学生による「山の音楽家」は多重録音の機能を用いることにより、次のような音色で旋律と伴奏を重ねている。

表4 「山の音楽家」の音色一覧

	テーマ	音色
シーン1	せっかちなこりす	伴奏：バイオリン 旋律：ピチカート
シーン2	優雅なうさぎ	伴奏：ピアノ 旋律：ストリングス
シーン3	陽気なことり	伴奏：フルート 旋律：ピッコロ
シーン4	のんびりたぬき	伴奏：ベース 旋律：マリンバ
シーン5	山の音楽家	ピアノ、ドラム ベース、フルート

② テンポを変える

テンポを変えることもアレンジの身近な方法である。場面設定の中でも「急いで」「あわてて」「のんびり」「ゆったり」といった速さを表す表現がなされている。学生の作品の中で特に変化が大きかったのは、S5の「どんぐりころころ」である。（表5）シーン1と2の

変化が大きい。

表5 「どんぐりころころ」のテンポの変化

	テーマ	場面設定	テンポ
シーン1	出発	ドキドキ、急いで準備	♩ = 104
シーン2	宇宙	のんびり宇宙遊泳	♩ = 66
シーン3	遭遇	宇宙人と不思議なかけあい	♩ = 88
シーン4	トラブル	機械のトラブル	♩ = 80
シーン5	修理	少しずつ直していく	♩ = 90
シーン6	帰還	山にもどっていく	♩ = 84

③ 伴奏をアレンジする

伴奏のアレンジも全員が用いており、これは2年生前期に行った様々な伴奏パターンの学習が活かされていた。S7の学生はシーン5で旋律の4分音符の部分で16分音符で刻んでいる以外はすべて旋律の形を変えずに伴奏のパターンのみで変化をつけていた。

また「ゆき」のシーン2や「まつぼっくり」のシーン1のような多重録音の機能を活用した両手伴奏を用いている学生も多かった。

④ 旋律をアレンジする

旋律のアレンジは7人の学生が行なっている。たとえば「ゆき」のシーン2は遊んでいる感じをテンポよく表現し、「まつぼっくり」のシーン2の2段目はコロコロ軽快に逃げているところを表現している。同じく「まつぼっくり」のシーン4のアルペッジョは夜の空をキラキラ光っている星を表現している。

⑤ リズムや拍子を変える

2分の1拍子を8分の6にするなどリズムや拍子を変える方法である。

⑥ 他の楽曲と合わせる

S1の学生は「春が来た」と合唱曲「心の中にきらめいて」（作曲 橋本祥路）の伴奏を、S2の学生は「かたつむり」と「さんぽ」（作曲 久石譲）の伴奏を重ねていた。

⑦ 転調する

S1の学生はハ長調からハ短調に転調し、春の雨模様を表現した。S6の学生はヘ長調からニ短調に転調し、みんなとはぐれてしまったさみしさを表現している。

⑧ コードやコード進行を変える
試みようとしているが、ほとんどなし。

サントで表現していた。また大吹雪が迫ってくる様子を旋律の繰り返しで表現していた。

⑨ その他の工夫

スタカート、グリッサンド、ベースやオブリガートに旋律を繰り返しいれるなどである。S7の学生が雨の降る様子をスタカートで、虹のでのる感じをグリッ

(4) 学生の振り返り

学生の振り返りでは、アレンジにおいて「工夫したこと」「苦労したこと」「役に立ったきっかけ」について尋ねた。個々の学生ごとにまとめた。(表6)

表6 学生の振り返り

学生	工夫したこと	難しかったと思うこと	アレンジに役立ったきっかけ
S1	・雨のシーンで、短調にして少しダイナミックにした ・フロッピーを使い、合唱曲「心の中にきらめいて」の伴奏に「春がきた」のメロディをあてはめた	・最初、曲に対してあまりイメージがまとまらず、ストーリーも全く見えていなかった ・全体的に感性までに時間がかかった	・先生のアドバイス ・色々な音色を使って弾いてみたこと
S2	・音色を変えた ・MLの常連になった	・直前まで追い詰められていた ・その時その時で思いつくものがちがいが、なかなかまとまらなかった ・全部同じようになってしまう気がした ・多重録音をマスターしきれなかった	記述なし
S3	・テーマを雪の名前にして、その意味に合った曲作りをした ・シーン2(回雪)では、スタカートにとり、犬が外で遊んでいる様子を表現した ・シーン3(衾雪)では、高い音を入れることで、まだ雪が降っている様子を表現した	・リズムが思いつかなかった ・和音で音を合わせる	・先生にたくさん聞いた ・「こぎつね」のアレンジを参考にした
S4	・音色をたくさん使った ・多重録音を使い、伴奏の工夫をした ・曲に緩急をつけた(全体として) ・最後はこれまでにない感じにした ・思い、たくさんの音を重ねた	・思いつくまでに時間がかかった	・先生のアドバイス
S5	・宇宙という漠然としたテーマから、宇宙遊泳ののんびりしたシーンを表現したり、シーン1(出発)では急いで準備をするあわただしさなどを表現した ・シーン4(トラブル)からシーン5(修理)はトラブルをフラットで表現し、もとに戻ることで修理をイメージした	・途中で何をどうしたら面白いかを考えるのが大変だった ・技術があるわけではないので、音色、曲調、弾き方について考えるのが難しかった ・一度思い浮かんで楽譜に残しても、少し経つと忘れて、違うものを弾いていた ・何度も考えられず、詰まってしまった	・先生のアドバイス ・シーン6(帰還)では結婚式で流れる最初の部分を使用した ・シーン2(宇宙)で、途中手をクロスしたのは以前弾いた「人形の夢と目覚め」から参考にした

S6	・テーマに沿ってテンポ、音色、メロディのアレンジを工夫した ・みんなにイメージしてもらいやすいようにした ・自分のお気に入りにはシーン3で、移調によりガラッと変わり、作っていても楽しかった	・シーン2（逃げるまつぼっくり）のリズムがシーン5（森の仲間と踊る松ぼっくり）を作る時に、頭の中で邪魔をして、新しいリズムづくりでつまってしまった	・シーン5（森の仲間と踊る松ぼっくり）のファンファーレは先生の指導のおかげ ・フロッピーの多重録音も役立った
S7	・雨をスタッカートで表現したり、虹をグリッサンドで表現した	・似たようなものになってしまった	・ピアノの先生にスタッカートやグリッサンドを教えてもらった
S8	・原曲の形を大切にしながらイメージを工夫した ・音色、リズムの形を考えた（調は敢えて変えず） ・多重録音により音の厚みを考えた	・初めてのことで戸惑った（選曲から） ・どうしても似たような形になってしまった	・色々な音色を使えたことで、自分のお気に入りの音を見つけることができ、そこからイメージが膨らんだ

（5）学生の他者評価

演奏の際、全員に対してコメントを記す他者評価を行った。その中から楽譜で紹介をした「ゆき」と「まつぼっくり」を取り上げ、どのように受け止めているかを見てみたい。先ず、すべての学生が肯定的に受け止め、表現の意図することをくみ取ろうとしており、お互いの良さを認めている。さらに抽象的な記述ではなく、具体的なアレンジの方法に着目している感想も見受けられる。

① 「ゆき」のアレンジに対する評価

全体： テーマがおしゃれ。多重録音がうまく使われていた。同じ雪でもいろいろなアレンジがあっておもしろい。場面がしっかり伝わっていた。

シーン1：夜静かに降っている感じ。左手の形では雪が降っている様子を表していてすてきだなと思った。

シーン2：音が増えていて、聞いていて楽しい。

シーン3：音の厚みがあり、雪の重量感が伝わってきた。

シーン4：はじまりは何か来るという感じが表現れていた。迫ってくる様子が伝わってきた。吹雪にも感じたし、雪崩が起きていてそこから逃げようとしているように思えた。

② 「まつぼっくり」のアレンジに対する評価

全体： ストーリーもしっかりしていて聞きごた

えがありすてきだった。曲調もすごくぴったりですてきだった。テーマに沿った曲になっていてよかった。フロッピーの使い方がとても上手。

シーン2：すごく好き。逃げている様子が伝わってきた。途中からの「タラリラ」がすごく好き。急いで逃げているイメージができる。コロコロ転がっている様子がスタッカートによって表現されていてすてき。

シーン3：はぐれてしまったという表現がわかりやすかった。

シーン4：絶望から泣きつかれて眠ってしまった感じ。音色が星のキラキラした感じとよく合っていてよかった。

シーン5：ファンファーレのところは明るくなっていて楽しくなった。楽しい感じがすごく好き。1つのシーンの中で音色をサッと変えていてすごかった。

4. 結論

今回の研究では、保育者に必要とされる音楽的な専門性を育成するための一つの取り組みとして「楽曲アレンジ」を取り上げた。この活動は、学生が音とじっくり向き合う「場」となり、自己の持つイメージを音で表現する「パフォーマンス」を可能にしたと言える。この活動から見えてきた「じっくり音と向き合うことの意義」「イメージを音楽で実現する手立ての獲得」

「創造的な活動の設定に役立つMLシステムの可能性」の3つの視点について述べる。

(1) 音とじっくり向き合う場としての意義

この活動の特長は、目的が明確であり、その手立てがある程度用意され、優れた環境の中で、学生相互がうまく影響し合いながらすすめられたことである。課題の難易度についても、結果的に、彼らにとってちょうど良いものであった。悩みながらも解決が可能な範囲であったということである。

過程においては、学生は「イメージがまとまらない」「前につくったものに惑わされる」「全部同じようになってしまう」と難しさを感じていたが、それだけ音に真剣に向かい合っていたと捉えることができる。その時に役立ったきっかけは、事前に取り組んだ「小ぎつねの山の四季」の演奏であった。また指導教員(筆者)のアドバイスとの記述もあった。適切なアドバイスであったか検討の余地があると思われるが、学生が戸惑っている状態から抜け出せるアドバイスを心がけた。例えば、MLシステムの「多重録音」の紹介は学生の表現の幅を大きく広げた。またパートナーソングの手法の紹介では、コード進行を確かめながら、好きな楽曲との合致に喜んでいていた。

十分な時間を保障することで、音とあれこれとかかわり、試行錯誤を繰り返すことが音の発見につながると身をもって理解できたことは収穫である。「音を探すことの楽しさに気付いた」「急にひらめく瞬間があった」「完成した時はすごくうれしかった」「自分の求めているものに出会えた時はうれしかった」「他の人の発表を聞いて、またさらに音楽の世界は広まった」と肯定的な感想が多く見られた。

保育の場では子どもの表現に対して早急に正解を求めるのではなく、子どものその時点での在りようを先ず受け止めることから出発する。子どもは環境に対していろいろなかかわり方をし、その積み重ねによって、より良い状態を導くのである。じっくりとかかわる時間を保障し、見守り、待つことが求められる。そのことにおいては大人も子どもも類似していると言える

この活動では学生は自分の作品を大事にするとともに、他の学生の作品に対しても、イメージと音の関係をくみ取ろうとし、良さを認めていた。音に集中し、音で思考し、音を操作することの楽しさを感じ取ると

いう音と人とかかわりのあり方を学ぶ機会となったと感じている。

(2) イメージを音楽として実現する手立ての獲得

「楽曲アレンジ」の前半で行った「小ぎつねの山の四季」の演奏後の感想では、全員が肯定的に受け止めていた。いくつか紹介する。

- ・同じ曲をベースにしているのに、アレンジひとつで違う曲のようにするのがすごいと思った
- ・アレンジをすることによって小ぎつねの表情や感情まで変わったイメージをもつことができておもしろかった
- ・曲風に合わせて表現するためにはスタッカート、スラー、転調、リズムなどの様々な視点から工夫する必要があるんだと思った
- ・特にジャズというのは新鮮でオシャレだった
- ・テンポ、速さ、スタッカートをつけたりするだけで変わるの、少しずつやってみたいと思う
- ・アルペジオは難しいけどできたらいいなと思った等

イメージを音にする魅力と具体的な手立てについて着目していた。実際のアレンジでは、雨のシーンを短調に転調してダイナミックにしたり、スタッカートで犬が遊ぶ様子を表したり、同じ旋律をずっと繰り返すことで迫ってくる感じを表現するなど、様々な工夫が実現されていた。ただし学生によってばらつきがあり、多くの方法に挑戦している学生、旋律はほとんど変えずに伴奏のアレンジと音色の変化のみで表現している学生など差が見られた。授業では、発表をとおして他学生の演奏から学び、演奏と聴くことの両面から表現手法の獲得にアプローチした。

(3) 創造的な場の設定に役立つM.L.システムの可能性

今回の活動においてMLシステムは、学生の創造的な活動を支えるのに極めて効果的であった。ひとつは音色によるイメージの広がりである。多様な音色によって曲の表情が変わることは単純に楽しくもあり、ひとつの旋律に対して様々なイメージを試みる姿が見られた。2 つめは多重録音である。旋律と伴奏の音色を変える、旋律と両手伴奏、いくつものパートで合奏、表現の幅が大きく広がった。また録音機能により片手

ずつ無理なく表現できるという意味で、自分が今現在もっている力の中でイメージを実現できる可能性を広げていると言える。そしてヘッドホン機能により、同じ空間の中で8人が個々に取り組み、その中で一人一人に指導ができることは、授業の構造上有意義な空間となった。授業の後半、途中経過としての中間発表の機会を持ち、学生相互がコミュニケーションを図ったことで、よい刺激や影響により互いが高まっていった。

5. 今後の課題

学生は様々なアレンジ方法を工夫していたが、コードやコード進行を変える方法はほとんど用いていなかった。この学生たちは専門的な作曲や和声学に関する知識をほとんどもっていないのが実態である。しかし今現在、学生がもっている能力をフルに駆使することでイメージを音で表現できるということが明らかとな

った。またピアノの課題曲の難易度の差と今回のアレンジのできばえにはほとんど差が感じられなかった。つまりこのような活動は初心者であってもどの段階の学生であっても、ある一定の範囲において、可能であるということである。これまで初心者の指導に関するカリキュラムを作成してきたが、このような能力の習得にむけて、新たに内容を付け加えたいと考える。さらに今回の「小ぎつねの山の四季」のような意図的な活動の位置づけについても検討が必要である。体系的な指導内容の構築が必要であると考えます。

そして今回のような学びが子どもの表現活動を支える上でどうつながっているのかエビデンスによる検証が必要であろう。本論での試みはほんの一步にすぎない。今後さらに多くの学生と取り組み、さまざまなケースに対応していくと共に、今後は子どもを取り巻く環境に着目し、他の場面においても考えていきたい。

引用文献

- (1) 宮脇長谷子 (2001) 「保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題—養成校へのアンケート調査を通して—」 静岡県立短期大学部研究紀要 15-W 号 (2001 年度) -1 p p 1-11
- (2) 坂田直子・山根直人・伊藤誠 (2009) 「保育者養成における音楽的専門性の育成—幼稚園教諭へのピアノ等鍵盤楽器に関する質問紙調査を手がかりに—」 埼玉大学紀要 58、p p 15-30
- (3) 赤津裕子 (2015) 「ML システムを活用した初心者のピアノ指導における成果と課題」 電子キーボード音楽研究 Vol. 10. p p 13-23
- (4) 文部科学省 (2017) 「教育職員免許法・同施行規則の改正及び教職課程コアカリキュラムについて」 文部科学省初等中等教育局教職員課 資料 1-1
- (5) 今川恭子・志民一成・木村充子他 (2013) 「おんがくのしくみ—歌って動いてつくってわかる音楽理論」 教育芸術出版社 p p 84-105

[Summary]

Fostering the musical creativity required of kindergarten or nursery school teachers

- Through the lesson using the ML system in our College -

Yuko AKATSU

Kindergarten or nursery school teachers are now required not only musical performance skill but also musical creativity. In order to foster the musical creativity, our College started the lesson on "music arrangement" as a first step. Through analyzing students' works and reviews in this lesson, I studied the teaching methodology of this type. As the result, two important things to realize images with sound were confirmed. One is to provide sufficient experience. The other is to teach various arrangement skills. It was also confirmed that the ML system is effective in this kind of creative lesson.

Keywords: kindergarten teacher, ML System, musical creativity, music arrangement

(竹早教員保育士養成所 あかつ ゆうこ)